

マイコプラズマ感染症による咳嗽が遷延する機序解明への アプローチ

—遷延咳嗽抑制に有用な鎮咳薬の検討—

渡邊直人^{2) 1)}、中川武正³⁾、宮澤輝臣¹⁾

聖マリアンナ医科大学呼吸器・感染症内科¹⁾

城西国際大学薬学部薬理学講座²⁾

白浜町国民健康保険直営川添診療所³⁾

【目的】マイコプラズマ感染症の咳嗽が遷延する機序を解明するために、末梢性および中枢性鎮咳薬ないしその併用投与による咳嗽抑制効果を比較検討し、それらの薬効よりアプローチを試みた。

【方法】マイコプラズマ気管支炎患者24名(男性5名、女性19名)を対象に、アジスロマイシン500mg/日の3日間投与に併用薬として、封筒法によりA群(7名、平均35歳)：麦門冬湯9g/日(末梢性鎮咳薬)、B群(9名、平均32歳)：ヒベンズ酸チペピジン60mg/日(中枢性鎮咳薬)、C群(8名、平均33歳)：両薬併用を各々2週間投与し咳嗽に対する抑制効果を咳点数で評価し比較検討した。また、喀痰採取可能だった9名につき喀痰中の好酸球比率を測定した。マイコプラズマ気管支炎の診断は咳嗽が主訴で、胸部X線上異常陰影を認めず、マイコプラズマPA抗体価が80倍以上に上昇している者とした。

【結果】A群とC群は咳点数(最高9スコア)が投与4日目で初めて有意に減少し、B群は投与7日目で有意に減少した。喀痰中に好酸球が検出された者が4例認められた。

【考察】喀痰中に好酸球が存在する症例が少なからず認められたこと、麦門冬湯が速やかに鎮咳効果を発揮したことからマイコプラズマ感染症による咳嗽が遷延する機序には喘息病態に近いアレルギー性炎症および気道収縮が関与している可能性が考えられる。